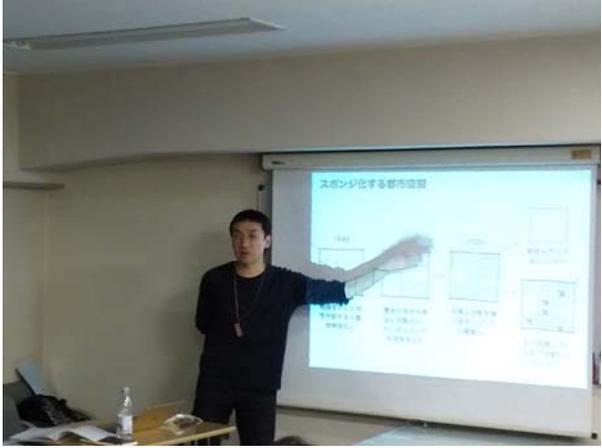


第 237回 都市懇サロン レポート	「人口減少時代の都市計画」		
講 師	饗庭 伸 先生	開 催 日	令和 元年 12月 10日(火)
講 師 プロフィール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1993 年：早稲田大学理工学部 建設学科卒業 ・ 2003 年：博士（工学） ・ 現在：首都大学東京都市環境学部教授 ・ 都市計画・まちづくり専門 ・ 主な著書 『都市をたたむ』 『白熱講義 これからの日本に都市計画は必要ですか』など 		
お話の概要	<p>○スポンジ化する都市空間</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 講師は、都市は外側から縮小すると予想したが、元々都市は中心から外側へ拡大したため、外側がいちばん新しい。したがって、外側から縮小することはなく、街のいたるところに空き家や閑散とした商店街が発生し、ポツポツと空洞化する。⇒スポンジ化 ・ スポンジ化の基本的な流れは、人口が最初に減少し、その次に世帯数、その次に住宅数が減少する。人口が減ったとしても必ずしもそれが問題になるわけではない。また、世帯数や住宅数が減ったとしても、市場価値が残っていれば不動産の取引が促進され、数が戻ることもある。 <p>○人口減少時代の都市計画</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ まちの住民が皆、街の中心に向かって移り住めば理想的なコンパクトシティも目指せるが、現実論としては、既成市街地は収縮せずにスポンジ型に密度が低くなる。この実態を捉えて、理想を忘れず、ただ現実から離れすぎないように落とし所を考えて導くことが都市計画に求められている。 ・ 公共による都市機能整備地区の周辺エリアや、スポンジの穴を利用した民間開発地区の周辺エリアでは、自然に居住地が維持されていくと考えられる。これらにより、都市機能を分散させつつも人口減少時代に合ったまちの形成ができると思う。 		
意見交換 の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・ 民間による開発が起きても波及しないような都市の、にぎわいを取り戻すにはどうすれば良いか。 ⇒必ずしも昔のにぎわいを現代に取り戻すことが重要ではないと思う。現代は情報発信ツールが発達しており、活用方法の工夫によって、どこでも商業を成り立たせることができるようになった。 ・ 一部の自治体では、インフラの維持管理や公共サービス等を効率化させるため、強迫観念的にコンパクト化しないといけないと考えているところもあると思うが、学識の立場からはどう見えるか？ ⇒インフラの維持管理で言えば、道路が老朽化してもそれが直接的に死亡事故に関連する可能性は低い、橋とトンネルの維持管理はその可能性があり急務であると思う。 ・ 有効活用できない空き家のストック問題を解決する方法や、解決した事例はあるのか？ ⇒空き家問題に対しては、これから空き家になるかもしれない住宅を探し、それらを適切に次の世代へ渡せるような未然の防止策を優先して考えるべきだと思う。 		
記録者の ひとこと	<p>人口減少など、国家として問題になっていることも適切な対応をすれば、まちとしての機能を保ちつつ対応していけるのではないかと考えることができた。人口減少に耐えうる都市計画については、得られる情報がまだ少ないので、自ら学んでいかなければならないと考えさせられた。</p> <p style="text-align: right;">《都市懇サロン運営部会 委員 加藤 諒平》</p>		